



玄関や居間、天井に家族の音が響きわたる。一つの時代も喜びや悲しみ、苦しみをもにわかち合い、助け合って生きてきた家族。そんな家族の営みが今に残る白沢村は、一世帯の構成人員が日本一多い「日本一大家族の村」です。

閉村記念特集

世代を越えて受け継がれる想い、家族の絆

日本一大家族の村



白沢村は、平成8年に一世帯の構成人員が日本一多い、「日本一大家族の村」になりました。初めて日本一になった平成8年は、一世帯あたり49人。平成18年は43人で現在も記録を更新中です。家族は社会の縮図。多くの家族が一つ屋根の下で喜怒哀楽をともに分かち合い、互いに尊重しながら人間関係を育み、そこから人を思いやる心や助け合いの精神を学びます。白沢村がなくなれば、日本一大家族の村ではなくなってしまいますが、お互いを尊重し合い、「何世代も家族が一緒に住める村」として、心にとどめながらこの特集を読んでいただけたらと思います。

時の流れとこの家に代々住んでいた人たちの想いと息吹を感じよう。大きな家。敷居をまたぎ一歩中に足を踏み入れると、家族と親戚の皆さんのにぎやかな声がこだまします。

二十六年。お見合いですか、恋愛結婚ですかの問いに「おしかけ女房(笑) 見合いでないから恋愛かな」と芳一さんと目を合わせて笑います。

渡辺さんのお宅は、芳一さんと綾子さん、長男の将志さんと嫁の理恵さん、孫の夕季乃ちゃんに、次男の望さん。そして、父義徳さんと母ミヤ子さんの四世代八人の大家族です。

田んぼは一町(約百アール)、畑は二町(約二百アール)以上を耕作し、日雇いで数人の人を使っていたそうです。現在耕作しなくなった農地は、公園にしたり、植木を植えたりしているが、維持管理が大変だと語る芳一さん。芳一さんも今は会社員として働いています。「農地があっても作らないと収入が得られない。収入が得られなくても支払いはしなくてはならないか

返します。こんなやりとり。「嫁姑関係、うまくいっていいですね」と、芳一さんにかがうと「一番大変なのは俺なんだけど(笑)」と冗談交じりの余裕の笑み。皆さんの会話の一つ一つから、口先だけではない想いが感じられます。

ら、会社勤めをしている。百姓だけではやっていけないからね」と言う芳一さんに「将来、今の状態ではいけない。若い人(息子夫婦)は若い人でやっていかなくてはならないから」と綾子さんも口をそろえます。

交代。遅番のときは毎日残業になることが多く、家族とはすれ違いの生活になり、子どもの顔を見るのができないそうです。そんな若夫婦に家族とは何ですかと聞いたところ「支えであり、力の源、原動力です。いないとさびしい」と家族の大切さを語ってくれました。

最後に家族への一言をお願いしたところ、「お父さん(芳一さん)を応援します」と義徳さん。ミヤ子さんは「悪いことは悪いことだから苦言は言う。そんなことはあんまりないけどいい」と一言。綾子さんは「家族みんなで仲良くやりましょう。若い人も仲良くない」とこの家の主人、芳一さんは「みんなが欠けないように健康でいてほしい」と笑みを浮かべます。